

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】野澤 暁子

【所属】(助成決定時)名古屋大学大学院文学研究科

【研究題目】

バリ島先住民稲作村落における鉄製楽器「スロンディン」の芸術人類学研究
—東南アジア稲作民の基層的世界観

【研究の目的】

インドネシア・バリ島は青銅製打楽器合奏(ガムラン)が、先住民村落には、「スロンディン」という希少な鉄製鍵板打楽器が伝承される。先住民村落は稲田を共同所有する地主村で、村落外婚を行うと正規住民の資格を失う。村中央の集会所におかれたスロンディンは、村落正規住民のみ触れることのできる、特権的存在である。

本研究は、「地主共産主義」ともいえる特異な村落構造と、それを文化的装置として支えるスロンディンの機能に注目し、音楽学的、宗教学的、政治社会学的諸側面より、バリ島稲作文化の解明を試みる。特に注目したいのは、金属の両義的性格である。鉄は、生産用具(農耕具)であり、破壊用具(武器)でもあるという二面性をもつ。申請者の調査村落で「鉄」は、人間社会の安寧を支え災いも引き起こす、両義的な超自然力として畏怖されている。この調査を通じて、バリ島先住民が稲作とともに育んだ、「鉄崇拜」を核とする世界観を明らかにしたい。

【研究の内容・方法】

[文献研究とこれまでの調査研究の整理]

Thomas Reuter, Urs Ramseyer, I Wayan Pande Tusan などのバリ島研究を整理した上で、東南アジア稲作文化と東南アジアの金属楽器音楽文化の研究も詳細に整理をおこなった。その上で、これまでの調査研究を複数の論文に整理し、不足している研究課題を整理した。

[現地調査]

トゥガナン・プグリンシンガン村を中心に、先住民村落の社会構造、生業、信仰、鉄崇拜とスロンディン文化に関するデータを集中的に収集した。また、調査村では農耕暦の節目(田植えと収穫)の年に二回、大規模な農耕儀礼が行われ、そこでは神具である鉄製打楽器スロンディンが重要な宗教的役割を果たす。毎年変動があるが、今年は1月末と6月であった。これは調査村の伝統暦にしたがい、「一月儀礼」「五月儀礼」と呼ばれる。本助成により、この二つの儀礼の集中的な現地調査を行った。加えて、スロンディンを伝承する他の10村落に関する広域調査も行った。

[学会への発表]

本調査で得られた、「地主共産主義」的な村落構造、鉄製鍵板打楽器スロンディン、鉄文化を核としたバリ島先住民村落の特異な社会構造・文化体系に関するデータを、現在名古屋大学大学院文学研究科へ提出する博士論文としてまとめている。これに加え、2012年4月22日には民族芸術学会第28回大会(大阪歴史博物館)で発表を行った。発表題目は、「バリ島の鉄製打楽器(スロンディン)の文化史的位置づけ—分布地域の立地条件および歴史資料からの考察」である。さらに、学術論文誌『南方文化』へ、論文「バリ島トゥガナン・プグリンシンガン村の五月儀礼—(地主村)としての内的垂直関係の強化—」を投稿し、すでに査読を通過し、現在編集中である。

[調査村への還元]

現在バリ島では「文化復興運動(アジェッグ・バリ)」が活発化している。この動きの中、先住民村落の伝承する貴重な伝統文化への関心と文化保護の意識が顕著な高まりを見せている。この状況から、調査で得た視聴覚資料をDVDの形に編集し、調査村および国立ウダヤナ大学などに寄贈を行った。

【結論・考察】

今回広域調査を行った結果、先住民村落ではスロンディンの取り扱いについて「外部者との接触」「村外での演奏」「儀礼文脈外での演奏」など、多くの禁忌をもつことが明らかになった。また、スロンディンの伝承村落の分布を検討した結果、殆どの村落が古い稲作の歴史をもつ、標高 200～300m の高地に集中していることが分かった。このことから、スロンディンの「鉄」は、稲作と深い関係をもつことが浮き彫りになった。さらにトゥガナン・プグリンシンガン村で行った二回の儀礼調査でも、多くの貴重なデータを得ることができた。彼らは「田植え」と「収穫」の次期に行われる儀礼において、神聖なスロンディンの鍵板をとりだし、「化粧」の儀礼を行うことによって、世界の生命力をはかっていることが観察された。彼らの世界観において鉄は、生産性、生命力をささえる存在として認識されているものである。スロンディンという鉄製鍵板打楽器の崇拝には、古くから農具として稲作を支えてきた「鉄への信仰」が背景としていることが明らかとなった。これは東南アジア稲作民の基層的世界観として、今後さらに追及する価値をもつと考える。